

古仏語における副詞節をなす 接続詞《que》について (比況節において) ⁽¹⁾

A propos de la conjonction «que» de l'ancien français
qui compose la proposition adverbiale
(dans la proposition comparative)

谷井博樹
HIROKI TANI I

1. はじめに

筆者は修士論文において、⁽²⁾副詞節を導く接続詞 que に就いての考察をした。我々はその際、副詞節を次の様に分類した。

- ① 譲歩節 (Proposition concessive)
- ② 比況節 (Proposition comparative)
- ③ 条件節 (Proposition conditionnelle)
- ④ 目的節 (Proposition finale)
- ⑤ 時況節 (Proposition temporelle)
- ⑥ 結果節 (Proposition consécutive)
- ⑦ 理由節 (Proposition causale)

(今回の発表で扱ったのは、②の比況節をなすものである。)

研究方法としては、「場」における分布(韻文/散文・Récit/Discours)を調べ、主節/従属節の動詞の時称の結び付きを調べることによって、まず各々の節において que 自体と、その他の(queを含む)接続詞句との違いを考察して、当該の節における que の価値を求める。(内的比較)次にそれらの que が各々の節ではお互いどの様に違っているかその価値を明らかにする。(外的比較)コーパスとして21のテキストから que 及び que を伴うその他の接続詞句の標本を1890抽出した。その母集団の「場」における分布を調べ、⁽³⁾母集団の各々の節における分布⁽⁴⁾及び副詞節をなす que の各々の節での分布を調べた。⁽⁵⁾

2. 本論(比況節をなす que)

2. 1. 序

我々がここにおいて考察の対象にするものは、égalitéを表す比況である。すなわち、《comme, ainsi que》の意味を表すものである。但し、我々は《com》自体は扱わない。そして、《plus~que》及び《moins~que》の様な「係り結び」にある比較の関係を表すものは扱わないこととする。⁽⁶⁾

2. 2. 各接続詞 [句] の韻文 / 散文・Récit / Discoursにおける分布

ここでは況節自体において、各々の接続詞 [句] がどの様に分布しているかを見てみよう。分布の実測値は、下の表の通りである。

	韻・R	韻・D	散・R	散・D	合計
que	3	6	1	0	10
selon ce que	0	0	3	1	4
si que	0	0	2	0	2
tant que	0	0	1	1	2
合計	3	6	7	2	18

queは殆ど韻文に現われており、その他のものは散文のみに現われている。

2. 3. 主節 / 従属節における tiroir の結び付きの分布

比況節全体での、主節 / 従属節の tiroir の結び付きを見てみよう。それは次の表の様になっている。

主節 / 従属節	直・現在	直・複過	直・単過	直・前過	直・半過	直・未来	接・現在	接・半過	合計
直・現在			2				1	1	4
直・複過			3						3
直・単過	1		2		1				4
直・前過									
直・半過			1		2				3
直・大過			1						1
直・未来						1			1
接・半過			1		1				2
合計	1		10		4	1	1	1	18

この表から分かることは、同じ時制系列同士で結び付きやすいということである。また従属節に接続法が現われる例は非常に少ないことが判る。

2. 4. 各接続詞句の考察

以下において各々の接続詞 [句] に就いて見て行くことにする。まず我々の考察の中心となる queを見た後に、その他の接続詞句に就いて見ることにする。

2. 4. 1. que

「場」における分布状況を見直すと、下のようになっている。

	Récit	Discours	計
韻	3	6	9
散	1	0	1
計	4	6	10

主節／従属節の tiroir の結び付きは、下の表の様になっている。

主節 ／ 従属節	直・現在	直・複過	直・単過	直・前過	直・半過	直・大過	直・未来	合計
直・現在			2					2
直・複過			2					2
直・単過	1		2					3
直・未来							1	1
接・半過			1		1			2
合計	1		7		1		1	10

当該の que は、《come》と同じ意味内容を持ち、その代わりに用いられていると考える説が有力である。〔7〕

また、元来は様態を表す結果節であったが、比況を表すようになったとも考えられる。〔8〕

また、ここでの que を QUAM に求めるものもいる。〔9〕

以下において、我々のコーパスからの標本を見てみよう。

① savez / sîtes (韻・R)

Deus i fist granz miracles, li glorios del ciel,
 Que tote la grant eve fait eissir de son biet,
 Espandre par les chans, que tuit le virent bien,
 Entrer en la citet et emplir les celiers,
 La gent le rei Hugon et guaer et moillier. (Pèl. 774-8)

「天の栄光たる神はそこで大きな奇跡を行った、
 (則ち) 大河をすっかりその川床から出させ
 平原に流れさせ、全員がはつきり見た通りに、
 町に入らせ、酒蔵を満たさせ、
 ユーグ王の家臣達を水浸しにさせ濡らさせた。」

主節の savez は「歴史的現在」を表しており、主節の内容を p、従属節の内容を q で表すと、ここでは p/q は同時性を表している。〔10〕

② sîtes / savez (韻・D)

«Glorïeus pere, qui formas tot le mont,
 Qui feïs terre sus le marbrin perron,
 De mer salee la closis environ,
 Adam feïs de terre et de lymon,
 Evain sa per, que de fi le savon,
 De paradis lor feïstes le don,
 Le fruit des arbres lor meïs a bandon,

Fors d'un pomier lor veastes le don:» (Louis. 977-84)
 「『栄光に輝く父よ、(あなたは)全世界をお創りになり、
 大理石の上に大地を創り、
 塩辛い海でその周りを囲い、
 大地と土からアダムを創り、
 その相手イヴをお創りになった、私達がそれを確かに知っている様に、
 (そして)彼等に天の賜をお与えになり、
 木の実を思うがままにお渡しになりました、
 あなたが賜として彼等に禁じたりんごを除いて。』」

ここの主節の *sûtes* は過去の事実を表し、従属節の *savez* は発話時点での現在を表すものである。〈11〉

③ *sûtes* / *savez* (韻・D)

«Son fill ocis, *que* por voir le set hom;» (Louis. 2094)
 「『私は彼の息子を殺しました、人が本当にそれを知っている様に。』」

ここの前例と同様に、主節の *sûtes* は過去の事実を表し、従属節の *savez* は発話時点と同時であることを表している。

④ *sûtes* / *avez su* (韻・R)

Vint errant en la chambre ou la pelote fut,
 A une main la livet, si la trait par vertu,
 Si la laisset aler *que* trestuit l'ontveūt. (Pèl. 747-9)
 「彼は球がある部屋に大急ぎでやって来て、
 それを片手で持ち上げ、そしてそれを力を込めて投げ、
 そしてそれを進むがままにしておいた、全員が見た通りに。」

主節の *sûtes* は過去における事実を表しており、従属節の *avez su* は発話時点での現在の完了形であり、ここでは過去の内容を表しているので、*p/q* は同時であると言える。〈12〉

⑤ *sûtes* / *sûtes* (韻・D)

«Jostai a lui, *quel* virent maint baron.» (Char. 207)
 「『私は彼に斬りかかりました、多くの諸侯がそれを見た通り。』」

⑥ *sûtes* / *sûtes* (韻・D)

Passai avant si con la cort fu large,
Que bien le virent et li un et li autre,
 Et l'apostolie et tuit li patriarche; (Char. 176-8)
 「私は、宮廷が広いのと同様に前に進んだ、
 誰も彼も教皇も全ての族長もしっかと見た通りに。」

ここでは⑤及び⑥は主節・従属節共に *sûtes* であり、発話時点から見た過去の事実を表しており、*p/q* は同時性を表している。〈13〉

⑦ sûtēs / sussiez (韻・R)

Il passe avant et tint l'espee longue :
ja le ferist **quel** veïssent .c. home,
Quant li escrie dans Guillelmes ses oncles : (Louis. 1904-6)
「彼は前に進み長い剣を取った。
すぐさま彼に斬りかかった、百人がそれを見たであろう通りに、
そのとき彼の叔父ギョーム殿は彼に叫んだ。」

主節は過去の事実を表すが、従属節の *sussiez* は過去における推測を表している。従って、p/q の関係では、ここも同時であると言える。

⑧ saviez / sussiez (散・R)

Chascuns regardoit ses armes tels con a lui convint, **que** de fi
seüssent que par tens en aront mestier. (Conq. (V), 132, 5-7)
「各人自分にふさわしい様な武器を吟味した、じきにそれが必要になる
ことを確信しているかの様に。」

ここも前例と同様に解釈される。

⑨ saurez / avez su (韻・D)

«Encui sera corronez au mostier
Son filz a roi, **que** François l'ont jugié.» (Louis. 1516-7)
「『本日教会にて彼の子息は王に即位させられますでしょう、
フランス人達がそう決めた通りに。』」

主節の *saurez* は発話時点以降に起こることを表し、従属節の *avez su* は発話時点において既に完了していることを表している。従って、p/q の関係では、q の方が p に先行している。

⑩ saurez / saurez (韻・D)

«Demain le ferai tote eissir de son chenel,
Espandre par cez chans, **que** vos tuit le verrez,
Toz les celiers emplir qui sont en la citet,
La gent le rei Hugon et moillier et guaer,
En la plus halte tor lui meïsme monter :
Ja n'en descendrat mais, si l'avrai comandet.» (Pèl. 556-61)
「『明日私はそれをすっかりその川床から出し、
あなた方皆がそれをご覧になる様に、この平原に流れさせ、
そして町にある全ての酒蔵を満たさせ、
ユーグ王の家臣達を濡らして水浸しにさせ、
彼自身を塔の最も高い所に登らせるでしょう。
私が命じるまで、彼は決してそこから降りぬでしょう。』」

ここは主節・従属節共に *saurez* であり、発話時点以降に起こることを示しており、p/q の関係は同時である。

以上のことから当該の接続詞に就いて纏めると、多くの場合において、p/qの関係は「同時性」を表している。また、qの動詞に就いては、十例のうち六例が《veoir》であり、三例が《saver》そして残りの一つが《jugier》である。ここから考るに、当該の接続詞におけるqは「知覚・判断」の意味内容を持つ動詞が現われる傾向にあると考えられる。

2. 4. 2. selon ce que

ここでは我々は標本を四例しか持っていないので、分布状況をあげるのは差し控え、後に実例を見るにとどめておく。⁽¹⁴⁾

⑪ sûtēs / saviez (散・R)

Quant nos gens qui estoient bien armés vaissiaus, meismement li chevalier, virent ce, n'entendirent pas a suir le gonfanon monseigneur saint Denis, ainz alerent en la mer a pié tout armé, li uns jusques as aisseles, li autres jusques as mameles, li uns plus en parfont et li autre mains, **selonc ce que** la mers estoit plus parfonde en un lieu que en un autre. (Lettre. IX, 10-4)

「戦場にて見事に武装した我々の軍勢、とりわけ騎士達はそれを見ると、我が主聖ドウニの吹き流しが続いて来るのも解さずに、むしろ武装したままで海中に徒歩で進んで行った、有る者は腋の下まで、またある者は胸まで、ある者は更に深く、またある者はより浅く（水に漬かって）、海がある場所で他の場所よりも深くなるに応じて。」

主節の sûtēs は過去の時点を示しており、従属節の saviez はその背景を示している。従って、p/q の関係は同時である。

⑫ sûtēs / aviez su (散・D)

«Li nos demanda par ordre nostre ligniee, se nostre pere vivoit et se nos avions nul frere, et nos li respondismes maintenant **selonc ce qu'il** nos avoit demandé.» (Gen. XLIII, 7)

「『彼は私達に順に私達の血筋のことを尋ねました、私達の父が生きているか私達は他に弟がいるかと、そして私達はすぐに彼に答えました、彼が私達に尋ねたのに応じて。』」

主節は前例と同様に過去の一時点を表しているが、従属節の aviez su はその背景をなし、なおかつ主節に先んじていることが完了形により示されている。

⑬ saviez / saviez (散・R)

si departi on avant as contes et puis après as autres haus hommes, et eswardoit on **selonc chou qu'il** estoit plus rikes hons et plus haus hons et qu'il avoit eu plus de gent de se maisnie en l'ost, se li donnoit on plus terre. (Conq. (R), CVII, 9-14)

「そしてまず領主達にそして後に他の身分の高い者達に分け与えた、そしてより権勢ある者かより身分の高い者であるか更に軍隊においてより多くの一族郎党を持っているかに応じて、その者に更なる領地を与える

か検討した。」

主節の *saviez* は過去においてある一定の間継続したことを表し、従属節における *saviez* はその背景をなしている。従って、*p/q* は同時である。

⑭ *savez / sachiez* (散文・R)

Ces larrecins pooient il faire legierement, car ja soit ce que li rois ait dedens la cité de Damiete la royne sa femme et une partie de son harnois dedenz le palais et les fremetez le soudant de Babiloine et li legas son harnois dedenz les sales et les fremetez le roy qui fu occis en la bataille quant nous arrivames, et chscuns des barons ait aussi son grant ostel et bel dedens la cité de Damiete *selonc ce que* li convient, nequedent li os de la crestienté et li roys et li legas sont logié dehors la vile. (Lettre. XVII, 16-26)

「彼等はそうした略奪をたやすくやることが出来ました、と言うのも王はダミエットの町に妻たる王妃をバビロニアの皇帝の要塞と宮殿の中に武具の一部を持っていたにも拘らず、そして総督は自分の武具を部屋と我々が着いた時には死んでしまっていた王の要塞に、各諸侯もまたダミエットの町の中に自分にふさわしいように大きく立派な館を持っていたにも拘らず、しかしながらキリスト教との軍勢と王と総督は町の外に陣を築いていたからなのです。」

ここで主節に *sachiez* が現われているのは、それが「*ja soit ce que*」に支配されていることによっている。そして従属節の *savez* は主節と同時の内容を表している。

以上のことから纏めると、当該の接続詞は、概ね「同時性」を表していると考えられよう。

2. 4. 3. *si que*

si que は *si com* と同等の価値を持って使用されている。則ち、*que* が *com* と同じ価値を持ち、後者の代りに用いられていると言えよう。〔15〕

我々のコーパスにおける実例を見て、検討することにしよう。但し二例しか標本を見付けることが出来なかった。

⑮ *sûtes / avez su* (散文・R)

Nicolete fu en prison, *si que* vous avés oï et entendu, en le canbre. (Auc. VI, 1-2)

「ニコレットは、あなた方がお聞きになりおわかりになった通り、寝室で捕らわれの身となりました。」

主節の *sûtes* は過去の一時点を表し、従属節の *avez su* は発話時点で完了していることを表している。従って、*p/q* の関係では、*p* の方が *q* に先んじている。

⑩ saviez / sûtés (散・R)

et coupoient en tele maniere li sarrazin Beduin les testes des pendus, et deffouoient les cors qui estoient enfouy en terre pour avoir les testes pour porter au soudant, **si que** on dist. (Lettre. XVII, 11-4)

「回教徒ベドゥイン人達はその様な仕方です首吊りされた者達の頭を切取り、皇帝に持って行く為の頭を得る為に地中に埋められている身体を掘り出しました、人がそう言った通りに。」

主節の saviez は過去にその様なことが何度もあったことを示し、従属節における sûtés は発話時点における過去を示している。⁽¹⁶⁾

以上二つの例から判ることは、p/q の関係は q の通りに p が起こったことを示しており、お互いの時制の関係では一様ではなく、各々の場合によっている。

2. 4. 4. tant que

tant que は tant com と同等の価値を持って用いられ、ここでも前と同様に que は com と同じ意味を持って用いられている。⁽¹⁷⁾

以下に実例を見て検討することにしよう。我々のコーパスには、二例しかなかった。

⑪ saviez / saviez (散・R)

que, **tant que** om pooit veoir a oïl, ne pooit on veoir se voilles non de nés et de vaissiaus, si que li cuer des hommes s'en esjoïssent mult. (Conq. (V), 120, 6-9)

「と言うのも、目で見ることが出来る限りでは、小舟や船の帆でなければ(しか)見る事が出来なかった、そして人々はそのことに就いてとても喜んでいた。」

ここは理由を表す que 節に埋め込まれている文であるが、主節の saviez は過去における継続状態を表し、従属節の saviez はそれと同時であることを示している。従って、p/q は同時である。そしてこの tant que は現代フランス語では «aussi loin que» の意味を持っている。⁽¹⁸⁾

⑫ sussiez / savez (散・D)

«Avoi!» fait Aucassins, «bele douce amie, ce ne porroit estre que vos m'amissiés **tant que** je fac vos.» (Auc. XIV, 17-8)

「『ああ』とオーカッサンは言いました、『美しく優しい恋人よ、私があなたを愛する程にあなたが私を愛するなんてあり得ないでしょう。』」

この文は «ce ne porroit estre que» に埋め込まれているので、主節の動詞は sussiez が現れている。そして従属節の savez は、時間的にそれと同時の事を表しているので、p/q は同時である。又、ここにおける tant que は、現代語では «autant que» の意味を持っている。⁽¹⁹⁾

以上二つから判ることは、いずれも同等比較で、p/qは同時性を表しているということである。

3. 結語

以上のことから次のことが結論出来よう。

queは多くの場合韻文に用いられ、queを含む他の接続詞句は我々の標本ではすべて散文に用いられている。

queに導かれる節の動詞の意義としては、「知覚・判断」を表す動詞である。そしてp/qの関係は、殆ど大抵の場合「同時性」を表しているのである。

当該のqueは、元来は単に《Begleitumstand》を表していたに過ぎなかったものが、「様態」や「結果」を表す様になり、更にそこから発展して、漠然とした《similitude》あるいは《ressemblance》を表す様になったのである。(しかし比況を表すのには、我々が考察の対象とはしなかった《com》によって表されるのが最も普通であるので、この用法でqueが用いられることは限られていると言えよう。)

注

- (1) 本稿は、1992年5月16日に岩手大学にて開催された、日本ロマンス語学会第29回大会において口頭発表した、「古仏語における副詞節をなすqueについて(比況節の場合)」に訂正・加筆したものである。
- (2) 平成2年度・学習院大学大学院人文科学研究科フランス文学専攻・修士論文「古フランス語における『万能の』接続詞queに就いての考察」
- (3) 以下の表のごとく分布している。

テキスト	韻文		散文		計
	R	D	R	D	
Alex.	8	8			16
Auc.	5	5	52	37	99
Bar.	33	35			68
Char.	23	21			44
Ch. Gui.	52	59			111
Conq. (R)			264	27	291
Conq. (V)			303	39	342
Eul.	1	0			1
Gen.			126	184	310
Lég.	10	0			10
Lettre.			15	0	15
Louis.	69	78			147
Marg.	13	22			35
Pal.	58	27			85
Pas.	17	4			21
Pèl.	12	15			27

Pr. d'Or.	33	45			78
Rol.	51	60			111
Serm.			0	1	1
Spon.	0	2			2
Ver.	40	36			76
総計	425	417	760	288	1890
	842		1048		

(上のテキストの sigle は以下のものを示す。)

- *Alex. = La Vie de Saint Alexis.
- *Auc. = Aucassin et Nicolette.
- *Bar. = Le chevalier au barisel.
- *Char. = Charroi de Nîmes.
- *Ch. Gui. = La Chanson de Guillaume.
- *Conq. (R) = Robert de Clari : La conquête de Constantinople.
- *Conq. (V) = Villehardouin : La conquête de Constantinople.
- *Eul. = Eulalia. (Prose de Sainte Eulalie)
- *Gen. = Genesis. (Genèse)
- *Lég. = Saint Léger.
- *Lettre. = Jean Sarrasin : Lettre à Nicolas Arrode.
- *Louis. = Le Couronnement de Louis.
- *Marg. = Wace : La Vie de sainte Marguerite.
- *Pal. = Huon le Roi : Le Vair Palefroi.
- *Pas. = La Passion de Christe.
- *Pèl. = Pèlerinage de Charlemagne à Jerusalem et à Constantinople.
- *Pr. d'Or. = La Prise d'Orange.
- *Rol. = La Canson de Roland.
- *Serm. = Les Serments de Strasbourg.
- *Spon. = Sponsus (La Mystère de l'Époux)
- *Ver. = La Chatelaine de Vergi.

(4) 分布は以下のごとく。

	韻・R	韻・D	散・R	散・D	合計
讓歩節	0	0	2	1	3
比況節	3	6	7	2	18
条件節	8	14	6	8	36
目的節	25	49	28	28	130
時間節	97	69	144	41	351
結果節	124	38	257	45	464
理由節	170	240	316	162	888
合計	427	416	760	287	1890

(5) 分布は次の表のようになっていいる。

	韻・R	韻・D	散・R	散・D	合計
讓歩節	0	0	0	0	0
比況節	3	6	1	0	10
条件節	0	0	0	1	1
目的節	24	45	23	28	120
時況節	2	10	7	0	19
結果節	105	31	34	12	182
理由節	45	109	147	33	334
合計	179	201	212	74	666

- (6) 我々は以下において、口頭発表の際に触れなかった、*que*を伴うその他の接続詞句に就いても見て行くとする。
- (7) GAMILLSCHEG, p. 749; IMBS, pp. 136-8; LERCH, I, pp. 227-42; dito, II, p. 356; MÉNARD, §225; SNEYDERS DE VOGEL, §374^{bis}, TOBLER, I, p. 174; dito, II, p. 60 et p. 104.
- (8) RITCHIE, pp. 101-2; MÉNARD, §249.
- (9) DARDEL, §6. 4. 1. 3. 7 et §6. 6. 4. 1.
- (10) LERCH, II, p. 365は時況節と解釈している。
- (11) DARDEL, p. 102; LERCH, I, p. 230(《*wie wir sicher wissen*》, RITCHIE, p. 102; SNEYDERS DE VOGEL, §374^{bis}も、比況節として引用している。
- (12) LERCH, II, p. 365では時況節としている。
- (13) RITCHIE, p. 102では比況節として引用されているが、LERCH, II, p. 326は時況節としている様であるが、《*ich turnierte mit ihm und viele Barone sahen es.*》の訳をあげ、結果を表すと解釈しているのであろう。また、MÉNARD, §249はpseudo-consécutifとしている。TOBLER, II, P. 126 sqq.はBegleitumstandを表す時況節と解釈している。
- (14) selon ce *que*に就いては次のものを参照。
BORLÉ, p. 182; GAMILLSCHEG, p. 331 et p. 742; HERMAN, pp. 234-5; LERCH, I, p. 228; dito, II, p. 401; RITCHIE, p. 103; SNEYDERS DE VOGEL, §374^{bis}.
- (15) 次のものを参照されたい。
IMBS, p. 137; TOBLER, I, p. 174; dito, II, p. 60 et p. 104.
- (16) HERMAN, p. 216, note 2はこの例をあげて、次の様に言っている。《*La locution si que assume parfois le rôle de la locution comparative si com, et cela dès l'ancien français.*》
- (17) (7)の文献及び以下のものを参照せよ。BORLÉ, p. 180 sqq.; BOURCIEZ, §324, c); LERCH, I, pp. 233-4, Anm. 5; MÉNARD, §257, 2°, Rem. 2; TOBLER, I, p. 179.
- (18) cf. IMBS, p. 138.
- (19) cf. BOURCIEZ, §324; IMBS, p. 137; MÉNARD, §257, 2°, Rem. 2.

主要参考文献

- * BORLÉ, Édouard : *Observation sur l'emploi des conjonctions de subordination dans la langue du XVI^e siècle, Étudié spécialement dans les deux ouvrages de Bernard de Palissy*, Paris, Les Belles

Lettres, 1927.

- * BOURCIEZ, Édouard : *Éléments de linguistique romane*, Cinquième édition, révisée par l'auteur et par les soins de Jean BOURCIEZ, Paris, Klincksieck, 1967.
- * DARDEL, Robert de : *Esquisse structurale des subordonnants conjonctionnels en roman commun*, (Publications romanes et françaises : CLXV), Genève, Droz, 1983.
- * GAMILLSCHEG, Ernst : *Historische französische Syntax*, Tübingen, Max Niemeyer, 1957.
- * HERMAN, Józef : *La formation du système roman des conjonctions de subordination*, Berlin, Akademie-Verlag, 1963.
- * IMBS, Paul : *Les propositions temporelles en ancien français*, La détermination du moment, Contribution à l'étude du temps grammatical français, (Publications de la Faculté des Lettres de l'Université de Strasbourg, Fascicule : 120), Paris, Les Belles Lettres, 1956.
- * LERCH, Eugen : *Historische französische Syntax, Bd. I und II*, Leipzig, O. R. Reisland, 1925 und 1929.
- * MÉNARD, Philippe : *Manuel du français du moyen âge, 1: Syntaxe du ancien français*, Bordeaux, SOBODI, 1976.
- * RITCHIE, Robert Lindsay Graeme M. A. : *Recherches sur la syntaxe de la conjonction «que» dans l'ancien français, depuis les origines de la langues jusqu'au commencement du XIII^e siècle*, Paris, Champion, 1907.
- * SNEYDERS DE VOGEL, Kornelis : *Syntaxe historique du français*, (Neophilologische Bibliothek), Groning/La Haye, J. -B. Wolters, 1919.
- * TOBLER, Adolf : *Vermischte Beiträge zur französischen Grammatik*, 5 Bde., Zweite, vermehrte Auflage (Bde. 1-3), Leipzig, Verlag von S. Hirzel, 1902-1912.